

R. ヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』における
ジークフリート暗殺の特質

石川 栄 作

Zur Charakteristik des Siegfriedsmordes
in R.Wagners »Götterdämmerung«

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Richard Wagner hat den Text der »Götterdämmerung« hauptsächlich mit den nordischen Materialien und dem Nibelungenlied geschaffen. Die Tragödie des Siegfriedsmordes, die er dort entwickelt hat, ist aber ganz verschieden von den hergebrachten Nibelungenüberlieferungen. Die Charakteristik des Siegfriedsmordes in der »Götterdämmerung« kann folgendermaßen in 5 Punkten zusammengefasst werden.

Die erste Charakteristik besteht in der eingehenden Schilderung der Liebe zwischen Siegfried und Brünnhilde. Ihre Liebe stammt aus der nordischen »Völsungasaga«. Dort stehen aber nur die ganz kurzen Beschreibungen von ihren zweimaligen Verlobungen. Wagner hat ihre Liebe weiter ausgeführt: Siegfried und Brünnhilde sind durch die schicksalhafte Liebe stark verbunden worden. Ihre Liebe verstärkt sich, indem Siegfried der Geliebten den Ring des Nibelungen geschenkt hat. Der Ring ist nun für die beiden das Symbol der Liebe.

Auf den Ring des Nibelungen zielt Hagen, der Halbbruder des Gunther. Diese Gestalt Hagens kommt von der nordischen »Thidrekssaga« her. Hagen ist aber bei Wagner kein Sohn des namenlosen Albes, wie in der nordischen Überlieferung, sondern gerade der Sohn des Nibelungen Alberich, der dem Ringräuber Wotan den Fluch ins Gesicht geschleudert hat: »Verflucht sei dieser Ring!« In dieser Herkunft Hagens liegt das zweite Merkmal: Der Kampf um den Ring zwischen Wotan und Alberich verändert sich nunmehr in den Streit zwischen Siegfried und Hagen. Der Ring symbolisiert für Hagen die Macht. Durch seine List entwickelt sich die Tragik des Siegfriedsmordes.

Die dritte Charakteristik besteht darin, dass Hagen bei dem Kampf zwischen der Liebe und der Macht als List einen Vergessenheitstrank benutzt. Der Trank stammt aus der »Völsungasaga«. Dort bot die Königin Grimhild, Gunnars Mutter, dem Gast Sigurd den Trank an. Bei Wagner übernimmt aber Hagen die Rolle der Königin. Der Trank hat ferner so wundersame Wirkung, dass der Genießer dabei eines Weibes ganz vergessen müsste, das er je ersah. Siegfried nimmt den Trank auf und verliert dadurch alles Gedächtnis an Brünnhilde. Er verliebt sich noch weiter in Gudrune, die vor ihm steht. Um die Liebe zu ihr verspricht er ihrem Bruder Gunther, ihm bei der Werbung um Brünnhilde zu helfen.

Beim Versprechen besiegeln Siegfried und Gunther ihren Bund durch einen feierlichen Schwur der Blutbrüderschaft. In der eingehenden Schilderung des Bundes liegt das vierte charakteristische Merkmal. In dem Nibelungenlied, aus dem der Bund der beiden stammt, steht aber nur eine Zeile, dass die herrlichen Männer einen Eid geschworen haben. Wagner hat diese Szene weiter ausgeführt. Damit spielt der Schwur in der »Götterdämmerung« eine sehr wichtige Rolle. Hagen ergreift später eine gerechtfertigte Gelegenheit, Siegfried zu ermorden, indem er behauptet, dass Siegfried bei der Werbung um Brünnhilde den Bund der Brüderschaft gebrochen hat. Den Tod Siegfrieds verursacht aber der Fluch des Ringes, nicht sein Meineid.

Die Handlung des Siegfriedsmordes entwickelt sich durch den Fluch des Nibelungen Alberich gleichzeitig mit der Götterdämmerung. Das ist gerade die fünfte, vorragendeste Charakteristik in der »Götterdämmerung«. Das Ende der Götter durch den Fluch des Nibelungen prophezeien die drei Nornen schon im Vorspiel. Später im ersten Aufzug erklärt auch Waltraute ihrer Schwester Brünnhilde, dass sich das Ende der Götter nähert, solange sie den Ring nicht in den Rhein zurückgibt. Aber Brünnhilde verweigert es. Damit verknüpft sich das Ende der Götter mit dem Tod Siegfrieds, der danach im dritten Aufzug von den drei Rheintöchtern weisgesagt wird. So geht Siegfried durch Hagens List mit den Göttern zugrunde. Hagen wird aber auch schließlich von den drei Rheintöchtern in die Tiefe des Flusses gezogen. Was bedeutet das Ende des Werks?

In dem Konflikt zwischen Siegfried und Hagen, d. h. der Liebe und der Macht, fällt zwar Siegfried durch Hagens List, aber wird in der letzten Szene im dritten Aufzug durch die Liebe der Brünnhilde gerettet. Der Opfertod der Brünnhilde, die mit ihrem Ross Grane in die hell auflodernden Flammen sprengt, deutet den Sieg der Liebe über die Macht an. Brünnhilde gewinnt nun damit die Liebe des Siegfried, wie einst Siegfried die Liebe der Brünnhilde durch das Springen über die Flamme erworben hat. Die

Flamme der Liebe zündet die Burg der Götter an. So bricht die Walhall zusammen. Aus den Trümmern zeigt sich aber die neue Welt der menschlichen Liebe. Darin besteht die Anziehungskraft der »Götterdämmerung« von Richard Wagner.

序

リヒャルト・ヴァーグナー（1813-83）の楽劇『ニーベルングの指環』四部作（台本1856年、総譜1874年完成）は、もともと『ジークフリートの死』（1848年）¹⁾と題された単独作であったが、その台本にはあまりにも多くの前史が含まれているという指摘を受けて、ヴァーグナーは改作を決意し、物語をさかのぼるかたちで1851年には『若きジークフリート』、翌1852年には『ヴァルキューレ』と『ラインの黄金』を書き上げ、四部作の長大な作品へと拡大させたことは周知の通りである。こうしてひとまず完成させた四部作の台本50部をヴァーグナーは1853年2月中旬に私家版で出版し、友人たちに寄贈している。その後、『若きジークフリート』と『ジークフリートの死』は1856年にも一部改訂され、それぞれの作品が最終的に『ジークフリート』と『神々の黄昏』に改題されたのは1863年のことであった。なお、作曲は1853年に台本とは逆の順番で物語の展開に従って『ラインの黄金』（1854年完成）から始められ、『ヴァルキューレ』（1856年完成）を経て、『ジークフリート』第二幕の途中で12年間中断したのち、『ジークフリート』（1871年完成）に続いて『神々の黄昏』の総譜が完成されたのは1874年11月のことであった。

このように楽劇『ニーベルングの指環』四部作は構想から完成までには実に26年の歳月を費やした作品であり、本稿で取り扱う『神々の黄昏』²⁾一つを取り上げても、かなりの改作を施されて完成された作品ということが容易に理解されよう。その現在の『神々の黄昏』がもともとの『ジークフリートの死』と大

1) R. Wagner: Siegfried's Tod. 山崎太郎訳：ジークフリートの死（三光長治・高辻知義・三宅幸夫・山崎太郎編訳『ラインの黄金』白水社1992年所収）

2) テキストには »R. Wagner: Götterdämmerung. Reclam, Stuttgart 1979« を使用し、テキストを訳出する際には下記の三つの邦訳を随時参照したことを付記しておく。

渡辺護訳：ニーベルングの指環(Notes & Libretto) キングレコード株式会社1978年
天野晶吉：ニーベルングの指環 対訳台本——ライトモチーフ譜例付 新書館1990年
三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：神々の黄昏 白水社1996年

大きく異なる点は、特に最終場面における神々の取り扱い方にあり、もともとの作品が永遠に栄える神々を賛美していたのに対して、現在の作品は逆に神々の黄昏を取り扱っているのである。この改作によって英雄ジークフリートの死の物語はもはや単なるニーベルンゲン伝承における暗殺物語ではなく、神々の黄昏物語の中に位置づけられ、神々の没落とともに平行して展開されることとなったのである。ニーベルンゲン伝承において伝統的なジークフリートとハーゲンの対立は、今や神々の^{おさ}長ヴォータンと^{こびと}侏儒族アルベリヒの争いに由来するものとなった。すなわち、ヴォータンがヴァルハル築城の報酬として巨人ファフナーに渡してしまった指環を取り戻すためにヴェルズング族の英雄ジークフリートを世に送り出すと、侏儒アルベリヒはそれに対抗する英雄として不義の子ハーゲンを儲けて、もともと自分の所有していたその指環を奪い返す夢を彼に託したのである。しかし、このヴォータンの孫ジークフリートは侏儒アルベリヒの息子ハーゲンの策略によってあえない最期を遂げる。この英雄ジークフリートの死は『神々の黄昏』の中では一体いかなる意味を持っているのであろうか。従来のニーベルンゲン伝承と異なることは容易に推測されよう。そこで本稿では、『神々の黄昏』における素材を確認しながら、英雄ジークフリート暗殺の物語を従来のニーベルンゲン伝承と比較考察することによって、『神々の黄昏』におけるジークフリート暗殺の特質を探り出すことにしたい。

I. 「神々の終焉」の予告とジークフリートの旅立ち — 序幕 —

『神々の黄昏』においてジークフリートの暗殺が従来のニーベルンゲン伝承と著しく異なるものであることは、まずその序幕において「神々の終焉」が三人のノルンによって予告されていることからすでに明らかである。この三人のノルンは北欧神話に由来する運命の女神であり、『歌謡エッダ』³⁾や『スノリのエッダ』⁴⁾でも数ヶ所に登場している。ヴァーグナーはこれら北欧神話を素材にして、『ジークフリートの死』においてすでにその三人のノルンが登場する序幕を設けていたが、しかしそこでは三人のノルンはアルベリヒがラインの黄金を盗み取って、指環を作った過去の出来事から、現在および未来の出来事を簡単に語るために登場したに過ぎなかった。『指環』四部作となって、神々の没落が全体のテーマとして前面に出ることに伴って、『神々の黄昏』序幕におけ

3) 谷口幸男訳：エッダ — 古代北欧歌謡集 新潮社1973年103頁参照。

4) 谷口幸男訳：前掲書237-9頁参照。

る三人のノルンの場面は特に「神々の終焉」の予告へと改作されることとなったのである。

その『神々の黄昏』序幕の舞台は、『ジークフリート』第三幕最終場面と同じく、ヴァルキューレの岩山の頂きである。夜、背景の谷底から炎の明かりが輝いている。三人のノルンが運命の綱を編んでいる。しばらく憂鬱な沈黙が続いたあと、まず第一のノルンが世界のトネリコの木で綱を編んでいた遠い昔のことを歌い始める。当時はまだ世界のトネリコの木は森のように緑色に茂り、涼しい木陰では泉の水が英知を湧き出たせていた。そこへ一人の神（ヴォータン）がやって来て、その泉から英知の水を飲む永遠の代償として自らの片目を支払うとともに、世界のトネリコの木から枝を一本切り取り、それから一本の槍を作り上げた⁵⁾。ところが、長い月日の経つうちに世界のトネリコの木はその傷のために枯れ果ててしまい、泉の水も渴き果てた。もはやその世界のトネリコの木で綱を編むことはできず、綱を縛るためには樅の木を使わなければならない有様である。

このような過去の話を受けて次に第二のノルンは、その後ヴォータンの槍が一人の勇士(ジークフリート)によって打ち砕かれた現在のことを歌う。ヴォータンはその槍の柄に契約のルーネ文字を刻み込んで、それを世界の留め金としていたのであるが、それが打ち砕かれたため、ヴォータンはヴァルハルの勇士たちに命じて世界のトネリコの木を切り倒してしまった。こうして現在はその木もなくなってしまい、泉も永遠に渴き果ててしまったので、とがった岩に綱を巻き付けるしかないという。

続いてそのあとの未来を歌うのが第三のノルンである。ヴォータンは巨人族の建てた城の広間に神々と英雄たちとともにすわっているが、その宮殿のまわりには割られた薪が高々と積み重ねられている。これこそはかつては世界のトネリコの木であった。この薪にやがて火がつけられて、その炎はヴァルハルの城を焼き焦がしてしまうであろう。「神々の終焉」はこうして近づいていることを第三のノルンは告げるのである。

三人のノルンはさらに綱を編みながら歌を続けるが、第一のノルンの目は今やかすんで、神々の過去をはっきりと見極めることはできない。かつて赤々と激しく燃え上がっていた火の神ローゲは、その後どうなったのか。この問いを

5) 世界のトネリコの木から槍を作り上げたことについては、ワーグナーの創作と考えられる。(三光長治・高辻知義・三宅幸夫監修：ワーグナー事典 東京書籍 2002年555頁参照)

受けて第二のノルンは、ローゲがヴォータンによって槍の魔力で押さえ付けられていたことを歌う。ローゲは自由になろうとして、ヴォータンの槍の柄にかじりついてルーネ文字を食い尽くそうとしたが、しかし、ヴォータンは槍の魔力でローゲを呪縛して、ブリュンヒルデの岩山のまわりに炎を燃え上がらせたのであった。続いて第三のノルンが告げて歌うには、その炎の火種を神が世界のトネリコの木の高く積まれた薪の中に投げ込むことになっているという。

その火種はいつ薪の中に投げ込まれるのか。ここに至って三人のノルンの心は混乱の極みである。第一のノルンにはもはや何も見えない。編んだ綱は絡み合い、綱の糸を見つけることもできない。すると彼女の心は一人の恐ろしい幻影にかき乱される。かつてラインの黄金を奪い取ったアルベリヒの幻影である。この侏儒はその後どうなったのか。このニーベルング（アルベリヒ）の指環が第二のノルンにも危急と怨恨の中から浮かび上がっているように見え、彼女の編む綱をかじっている。第三のノルンがその綱を無理やり手繰り寄せようとした瞬間、運命の綱はついに切れてしまった。永遠の知識も果てて、世界にはもはや何も知らせることがなくなった三人のノルンは、地底の母エルダのもとへ降りて行くのである。

このように序幕冒頭で三人のノルンによってほのめかされる「神々の終焉」こそまさに楽劇『神々の黄昏』の根底に流れている中心テーマであり、すべては最後に幻影となって現れた侏儒アルベリヒ、すなわち、ニーベルングの指環の呪いによるものであることが容易に理解されよう。そのあと夜が明けて岩屋から姿を現すジークフリートとブリュンヒルデもまた、そのニーベルングの指環の呪いの犠牲となるのである。前作『ジークフリート』第三幕最終場面において互いに愛するようになって以来、二人を包んだ愛の炎は一向に衰える様子がない。この二人の愛は北欧の素材『ヴォルスンガ・サガ』⁶⁾に由来するものであるが、そこでは二人が二度にわたって婚約を交わしたことがごく簡単に語られていたに過ぎない。それを敷衍して、激しくて熱い愛へと高めたのはヴァーグナーの功績である。しかし、二人がいくら愛し合う仲であっても、英雄ジークフリートは常に新しい冒険を求めて旅をしなければならない。しばしの別れを告げ合って、互いに別れを惜しむ場面が、この序幕後半である。

岩屋から出て来たジークフリートはすっかり武具に身を固め、ブリュンヒルデは彼女の馬の手綱を取っている。彼女は英雄ジークフリートを愛しているが

6) 菅原邦城訳：ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ 東海大学出版会1979年68-9頁および75頁参照。

ゆえに、新たな冒険の旅に彼を送り出すのである。ただ一つの心残りといえば、彼にとって自分の価値が不十分だったのではないかということである。ブリュンヒルデは、すなわち、神々が教えてくれた神聖なルーネ文字の豊富な知識をジークフリートに伝えたが、もはやこれ以上与えることのできない自分をさげすまないでほしいと願うばかりである。これに対してジークフリートはブリュンヒルデが多くの教えを授けてくれたことに感謝し、それらの教えがたとえ自分に十分に吸収されなかったとしても、ただ一つの知識、つまり自分にはブリュンヒルデがいるということ、そしてブリュンヒルデのことを想うという教えだけはたやすく学び取ったことを明らかにする。するとブリュンヒルデは、愛を示そうとするならば、火を乗り越えてここにやって来た自らの冒険のことを思い出してほしいと言ってから、次のように付け加える。

Gedenk der Eide,
die uns einen ;
gedenk der Treue,
die wir tragen ;
gedenk der Liebe,
der wir leben :

Brünnhilde brennt dann ewig
heilig dir in der Brust !

私たちを一つに結びつけている
誓いを思い出してください。

私たちが抱いている

誠実を思い出してください。

私たちがその中に生きている

愛を思い出してください。

そうすればブリュンヒルデは永遠に

清くあなたの胸の中で燃え続けます！

「誓い」と「誠実」と「愛」を思い出してほしいという表現の中に、やがてジークフリートがそれらを忘れてしまう運命が見え隠れしているが、もちろん二人は策略が待ち受けていることなど予想だにしていない。「清くあなたの胸の中で燃え続けます」というブリュンヒルデの言葉を受けて、ジークフリートもまた彼女を炎の聖なる保護のもとに委ねることにして、ニーベルングの指環を自分の指から抜き取ると、それを彼女に差し出して、次のように言う。

Zum Tausche deiner Runen
reich ich dir diesen Ring.
Was der Taten je ich schuf,
des Tugend schließt er ein.

Ich erschlug einen wilden Wurm, 恐ろしく長い間これを守っていた
der grimmig lang ihn bewacht.

ルーネ文字の知識との交換に
私はあなたにこの指環をあげよう。

私がかつて行った冒険の証^{あか}しが
その中にしまい込まれているのだ。

凶暴な竜を私が打ち殺したのだ。

Nun wahre du seine Kraft 私の誠実な聖なる挨拶として今や
als Weihegruß meiner Treu' ! その力をあなたが持っていないさい！

指環はジークフリートにとって自らの冒険の証しであり、ブリュンヒルデにとっては彼の誠実な愛の象徴でもある。このうえない贈り物を受け取ったブリュンヒルデはその代わりとして名馬グラエネを贈る。この馬はかつてブリュンヒルデが乗り回していたもので、今は電光ひらめく嵐の中を勇敢に駆け抜くことはできないが、ジークフリートの行くところへは、たとえ火の中であっても従ってついて行くという。「たとえ火の中であっても」という表現の中にも、いずれ来るべき悲惨な結末が見え隠れしているものの、ジークフリートはその名馬の贈り物を喜び、ブリュンヒルデの名馬の背中にまたがり、ブリュンヒルデの楯に護られて、常にブリュンヒルデと一緒に行動することを誓う。ジークフリートの出かけるところではどこでも二人は常に一緒であり、また岩屋でも常に二人は一緒だという。ジークフリートのこの言葉にブリュンヒルデも大いに感動して次のように叫ぶ。

O Heilige Götter ! ああ、聖なる神々よ！
Hehre Geschlechter ! 気高き一族よ！
Weidet eu'r Aug' 幸いに恵まれた
an dem weihvollen Paar ! 二人をごらんください！
Getrennt—wer will es scheiden ? 離れていても、誰が引き離せましょう？
Geschieden—trennt es sich nie ! 別れていても、別れてはいないのです！

離れ離れに暮らしても常に一緒であることを確信した二人が、互いに幸福を願う二重唱を歌い上げると、ジークフリートは急いで馬を引いて岩山の坂を下りて行く。しかし、こうして離れ離れになったことが災いのもとであった。二人の愛はやがてハーゲンの策略によって無残にも引き裂かれることとなるのである。

このようにヴァーグナーではジークフリートとブリュンヒルデの愛が従来のニーベルンゲン伝承においてよりもより明確なかたちで展開され、この二人の愛から物語が出発しているところに特質があると言ってよいであろう。しかし、その二人の愛もやがてアルベリヒの指環の呪いにより、神々の黄昏と一つになって滅びていくのであり、ジークフリートの旅立ちはまさに「神々の終焉」への旅の始まりをも意味しているのである。

II. ブリュンヒルデへの求婚 —— 第一幕 ——

序幕の幕が降りて、鳴り響くのが間奏曲「ジークフリートのラインの旅」である。ジークフリートがライン河沿いに冒険の旅を続けていることがほのめかされる。第一幕の幕が上がって、やがて彼が辿り着くのはライン河畔ギービヒ家の館である。

このギービヒ家の当主はグンターであり、彼には弟ハーゲンと妹グートルネがいるが、ハーゲンは異父兄弟ということになっている。このハーゲンとグンターの間柄については、従来のニーベルンゲン伝承ではおおまかに、1) グンターの実弟とする伝承、2) 異父兄弟とする伝承、3) 親族で、重臣とする伝承という三つのタイプに分けられる⁷⁾が、異父兄弟とする第二のタイプの伝承を伝えているのが北欧の『ティードレクス・サガ』⁸⁾である。それによると、ニフルンゲン国の王妃オーダがある日ワインに酔って戸外の庭で眠っていると、一人の妖怪(アルプ)が現れて彼女のそばに横になった。王妃はそれを夫アルドリアーンだと思ったが、男はすぐに姿を消したので、確認できなかった。その後、王妃は妊娠し、産褥の前に再びその男が現れ、やがて生まれる子供は自分の子であり、英雄になるだろうと言い残して、姿を消してしまった。こうして王妃から生まれたのがヘグニ(ハーゲン)であり、人間のように見えず、まさに妖怪(Troll)のようであったという。

ハーゲンの出自を考え出す際にヴァーグナーは、この北欧の『ティードレクス・サガ』、その中でも特に『ニフルンガ・サガ』と呼ばれている部分を利用したと推定されるが、しかしそのハーゲンは単なる無名の妖怪の子ではなく、あの侏儒族のアルベリヒ、すなわち、ラインの黄金から指環を作り上げ、のちにそれをヴォータンに奪い取られた恨みから、その指環に呪いをかけたあの侏儒アルベリヒの息子として登場しているところにヴァーグナーの独創性がある。ヴォータンがヴェルズング族の英雄ジークフリートに指環奪還の夢を託すと、侏儒アルベリヒはそれに対抗する英雄として不義の子ハーゲンを世に送り出したのである。ヴォータンとアルベリヒの争いは今やジークフリートとハーゲンの戦いとなって、ここにその指環の呪いの悲劇が展開し始めるのである。

7) 詳細については、拙稿：R. ヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』におけるハーゲン像の特質(稲元萌先生古稀記念ドイツ文学・語学論集 2003年)を参照のこと。

8) Vgl. Fine ERICHSEN (Übertragen): Die Geschichte Thidreks von Bern. (Thule 22. Band) Eugen Diederichs Verlag Jena 1924. S. 223.

ライン河畔ギービヒ家の館ではこのハーゲンが指導権を握っているということは、第一幕冒頭における兄弟の会話から明らかである。確かにグンターは長男として当主の座を受け継ぎはしたが、しかし知恵を受け継いだのはハーゲンだけで、グンターは常に弟ハーゲンの助言に従うばかりである。このたびも「ギービヒ一族は夏の盛りのような強さを誇っているかに見えるが、しかしグンターには妻がいないし、グートルーネには夫がいない」という指摘を受けると、グンターは「では誰に求婚すればよいのか」とハーゲンに助言を求めるのである。それに対してハーゲンは次のように答える。

Ein Weib weiß ich,	世界で最もすばらしい
das herrlichste der Welt :	女性を私は知っている。
auf Felsen hoch ihr Sitz,	彼女の住居は高い岩山の上にあり、
ein Feuer umbrennt ihren Saal ;	その部屋の周りを炎が取り囲んでいる。
nur wer durch das Feuer bricht,	炎を突き破ることのできる者だけが、
darf Brünnhildes Freier sein.	ブリュンヒルデに求婚できるのだ。

この場面でヴァーグナーは素材として『ヴォルスンガ・サガ』を用いたと推定されるが、その素材では邪な心の母后グリームヒルドが息子グンナルにブリュンヒルドへの求婚を勧めた⁹⁾のに対して、ヴァーグナーではハーゲンがブリュンヒルデの存在を教えてグンターに彼女への求婚を勧めている。『ヴォルスンガ・サガ』での母后の役割をことごとくハーゲンが受け継いでいることが明らかである。シグルズ（ジークフリート）とグズルーン（グートルーネ）を結びつけたのも素材では母后であったが、ここではそれらすべてはハーゲンによって推し進められることになる。すなわち、ハーゲンはグンターにブリュンヒルデへの求婚を勧めると同時に、その彼女の部屋の周りの炎の壁を突き破ることのできる者としてジークフリートを挙げ、彼をグートルーネの夫に迎えるよう進言するのである。

Siegfried, der Wälsungen Sproß :	ヴェルズングの子孫ジークフリート、
der ist der stärkste Held.	彼こそ最強の英雄だ。
Ein Zwillingsspaar,	双生児の兄妹である
von Liebe bezwungen,	ジークムントとジークリンデが、

9) 菅原邦城訳：前掲書83-4頁参照。

Siegmund und Sieglinde, 愛にかられて、
 zeugten den echten Sohn. 最も純粋な息子を儲けたのだ。
 Der im Walde mächtig erwuchs, 森の中で逞しく成長した彼こそ、
 den wünsch' ich Gutrn' zum Mann. グートルーネの夫に望んでいるのだ。

ハーゲンがジークフリートとグートルーネを結びつけようと画策している点では『ニーベルンゲンの歌』¹⁰⁾の影響も考えられよう。事実、その英雄叙事詩ではハゲネがジークフリートの冒険譚をグンテル王らに語って聞かせた(86-100詩節)ように、ここでもハーゲンがジークフリートの大蛇退治と財宝獲得の冒険について次のように歌って聞かせるのである。

Vor Neidhöhle	妬みの洞窟の中で
den Nibelungenhort	ニーベルンゲンの財宝を
bewachte ein riesiger Wurm :	巨大な蛇が護っていたが、
Siegfried schloß ihm	ジークフリートは
den freislichen Schlund,	その恐ろしい口を塞ぎ、
erschlug ihn mit siegendem Schwert.	勝利の剣でそれを打ち殺した。
Solch ungeheurer Tat	このようなものすごい冒険で
enttagte des Helden Ruhm.	英雄としての名声を轟かせたのだ。

このような英雄ジークフリートを妹グートルーネに結びつけようとするハーゲンの魂胆は、今やジークフリートの所有となっているニーベルンゲンの指環を奪い取ることにある。その秘策としてハーゲンは不思議な忘れ薬を用いることを提案する。この忘れ薬は素材の『ヴォルスンガ・サガ』に由来し、そこでは母后がそれをシグルズに飲ませたのであった¹¹⁾が、ヴァーグナーではその役割はハーゲンに移されており、しかもその忘れ薬はジークフリートが出会った過去の女性をすべて忘れさせるとともに、目の前にいる女性にたちまち惚れさせてしまうという効き目を持っている。このような秘薬の存在を知り、しかも英雄ジークフリートがやがてライン河畔のギービヒ家にもやって来るであろうこ

10) Helmut de BOOR (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage. Brockhaus Wiesbaden 1972. 相良守峯訳: ニーベルンゲンの歌 (全2冊) 岩波書店1955年。以下、詩節番号もこれらに従う。

11) 菅原邦城訳: 前掲書82頁参照。

とを知ったグンターとグートルーネは、喜んでその英雄を出迎える決意をするのである。すべてがハーゲンの策略通りに進んでいることが容易に理解できよう。

ハーゲンの予想通り、さっそくライン河から角笛が聞こえてきて、ジークフリートがギービヒ家の館に到着するが、この場面でもすべてがハーゲンの策略によって展開される。すなわち、歓迎の挨拶の言葉からハーゲンは巧みにニーベルンゲンの財宝のことを聞き出し、その財宝の一つである隠れ頭巾を見せられると、それについての知識を持ち合わせていないジークフリートにその効力を教えるのである。この隠れ頭巾は従来のニーベルンゲン伝説においては見出されず、『ニーベルンゲンの歌』において初めて取り入れられたもの¹²⁾で、その叙事詩において語られているところによると、それを身につけると、姿が見えなくなるばかりか、自分自身の力の外に十二人分の力が加わる(336-8詩節)という。ヴァーグナーはこの隠れ頭巾に若干の変更を加えて、それを被ればどんな姿にも変身でき、またどんな遠い所へも一飛びで辿り着くことができるとしたのである¹³⁾。このような知識をジークフリートに授けたのもハーゲンの策略の一つであることは言うまでもない。ハーゲンの策略はとどまるどころを知らず、さらに「そのほかには何の財宝も取らなかったのか」と尋ねる。「一つの指環を手に入れた」と答えるジークフリートに、なおも巧みに「それを大事に持っているだろうね」と言って、指環のありかを突き止めようとする。その指環の力について何も知らないジークフリートは「一人の気高い女性が持っている」と明かしてしまう。その気高い女性とはもちろんブリュンヒルデである。今や彼女が指環を手に行っていることを確信したハーゲンは、さらに自らの策略を推し進めて、グートルーネの部屋へ急ぐ。やがてグートルーネが部屋から出て来てジークフリートに歓迎の飲み物を差し出す。例の忘れ薬である。ブリュンヒルデへの誠実な愛を誓いながらその飲み物を口にするが、それを飲み干すとジークフリートはたちまち目の前にいるグートルーネに恋心を燃え上がらせて、彼女を見つめる。彼女の美しさの虜になってしまっていて、ジークフリートはさっそく彼女に契りを求めるが、彼女はへり下った様子で面を伏せて、その場を立ち去る。

12) 『ティードレクス・サガ』にも隠れ頭巾が用いられていることからすると、『ニーベルンゲンの歌』の素材(前段階)にも用いられていたと推定されるが、現存する作品としては『ニーベルンゲンの歌』が最初である。

13) 『ラインの黄金』ではさらに『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように、この隠れ頭巾を被れば、姿を消すことができるとされている。

何としても彼女と契りを結びたいジークフリートは、グンターに向かって妻がいるかと尋ねる。「一人の女性に心をかけているが、勝ち取る手立てがない」というグンターの言葉を聞くと、ジークフリートは彼に手助けをしようと言いつ出す。「その女性の住居は高い岩山の上であり、彼女の周りを炎が取り囲んでいる」ということに続いて、「その炎を突き破ることのできる者だけがブリュンヒルデに求婚できる」ということも聞かされるが、ジークフリートにはもはやブリュンヒルデの記憶がない。グンターはその山に登ることもできず、またその炎も突き破ることができないことを打ち明けると、ジークフリートは手助けを約束して、こう言う。

Ich fürchte kein Feuer,
für dich frei ich die Frau ;
denn dein Mann bin ich,
und mein Mut ist dein,
gewinn ich mir Gutrun' zum Weib.

私は炎を恐れないので、お前に代わって私がその女を求めてあげよう。
グートルーネを妻にもらえるなら、
私はお前の家来となり、
私の勇気はお前のものとしよう。

この条件に対してグンターも「グートルーネを喜んでお前に差し上げよう」と約束し、こうして両者の間で契約が成立するのである。この契約は『ヴォルスンガ・サガ』には読み取られず、『ニーベルングの歌』に由来するものと考えられるが、その英雄叙事詩ではそのあとわずか一行で「二人は互いに誓いをかためた」(335詩節)と語られているだけである。ヴァーグナーはそれを敷衍し、兄弟の契りを交わす場面を詳しく展開させることによって、この「兄弟の契り」に大きな意味を込めている。ハーゲンがのちにジークフリートを暗殺する口実としたのも、このグンターとの契りをジークフリートが破ったからであるとしている。しかし、ハーゲンの魂胆は最初からニーベルングの指環を奪い取ることにある。いずれ最後にはハーゲンはジークフリートを暗殺する必要がある。そのためこの場面でハーゲンは「兄弟の契り」には加わらないのである。ハーゲンの魂胆は、グンターがさっそくジークフリートを連れて出かけて行ったあとで、次のように一人つぶやくことから明らかである。

Hier sitz ich zur Wacht,
wahre den Hof,
wehre die Halle dem Feind.
Gibichs Sohne

ここにすわってわしは見張り、
屋敷を守り、
館を敵から守る。
ギービヒ家の息子は

wehet der Wind,	風に吹かれて、
auf Werben fährt er dahin.	求婚の旅に出かけて行く。
Ihm führt das Steuer	彼のために舵を取っているのは
ein starker Held,	一人の強き英雄で、
Gefahr ihm will er bestehn.	彼のために危険に立ち向かっている。
Die eigne Braut	自らの花嫁を
ihm bringt er zum Rhein ;	彼はこのラインに連れて来るのだ。
mir aber bringt er — den Ring !	だがわしには指環を持って来る！
Ihr freien Söhne,	お前たち、元気な若者たちよ、
frohe Gesellen,	楽しげな仲間たちよ、
segelt nur lustig dahin !	愉快に舟を走らせるのだ！
Dünkt er euch niedrig,	お前たちには低劣に見えようが、
ihr dient ihm doch,	しかし、お前たちこそ、このニーベ
des Nibelungen Sohn.	ルングの息子に仕えているのだ。

ハーゲンの陰謀が明らかである。ジークフリートのみならず、グンターもハーゲンに操られているのであり、グンターのブリュンヒルデへの求婚は指環をねらうハーゲンによって企てられたものであることが容易に理解できよう。

さて、そのハーゲンの策略の餌食となるブリュンヒルデは、ジークフリートからもらった指環を心の支えにして、高い岩山で彼の帰りを待ちわびている。そこへやって来たのが意外にも彼女の妹ヴァルトラウテであった。この場面はヴァーグナーの創作によるものであり、もともとの作品『ジークフリートの死』ではヴァルキューレたちが憂き身の上の姉を訪れて、その様子を伺ったに過ぎなかった¹⁴⁾が、『神々の黄昏』ではヴァルトラウテ一人が大胆にもヴァルハルの城を抜け出して姉のところへやって来て、神々が衰えていくさまを報告するというあらすじに改作され、しかもその報告に大きな意味が込められている。すなわち、ヴァルトラウテがブリュンヒルデに詳しく語って聞かせたところによると、ヴォータンはブリュンヒルデと別れてからというもの、もはやヴァルキューレたちを戦場に送り出すこともせず、ヴァルハルの英雄たちに会うのも避けて、さすらい人として一人で世界をさまようばかりであるという。最近、ヴァルハルに戻って来たときには、ヴォータンは手に槍の破片を持っていたが、それは一人の英雄に打ち砕かれたものであった。ヴォータンはヴァルハル

14) 山崎太郎訳：前掲書136-7頁参照。

の気高い者たちに世界のトネリコの木を切り倒し、その薪を広間の周りに高く積み重ねるように命じた。また神々を招集したときには、ヴォータンは高い席にすわって、言葉も口にせず、槍の破片を拳に握ったままであったという。二羽のカラスを旅立たせたときには、一度はよい知らせを持ち帰り、そのときにはヴォータンはほほ笑みはしたものの、それが最後であったという。ヴァルキューレたちが彼の膝を囲んで嘆願しても、彼は彼女たちのまなざしには見向きもしなかった。ヴァルトラウテが泣きながら彼の胸に身を押しつけると、そのとき彼のまなざしは砕けた。彼はブリュンヒルデのことを考えていたのだという。つまり、ヴォータンはそれから深く溜め息をつき、目を閉じて、夢見るように、「深きラインの娘たちに彼女が指環を返してくれればいいのに。そうすれば神と世界は呪いの重荷から解放されるのに！」とささやいたのである。ヴァルトラウテはこの言葉を聞くと、沈黙する神々の列を通り抜けて、急いで馬に飛び乗り、ブリュンヒルデのもとに駆けつけて来たのである。

このようなことを語り終えると、ヴァルトラウテは永遠の神の苦悩を終わらせるために、姉ブリュンヒルデに向かって指環をラインの乙女たちに返してほしいと嘆願する。「その指環には世界の災いが宿っている」というのである。妹の意外な要求に対して、ブリュンヒルデはその指環がどのような意味を持っているかについて次のように話して聞かせる。

Ha, weißt du,
was er mir ist ?
Wie kannst du's fassen,
fühllose Maid !
Mehr als Walhalls Wonne,
mehr als der Ewigen Ruhm
ist mir der Ring :
ein Blick auf sein helles Gold,
ein Blitz aus dem hehren Glanz
gilt mir werter
als aller Götter
ewig währendes Glück !
Denn selig aus ihm
leuchtet mir Siegfrieds Liebe,
Siegfrieds Liebe !

ああ、これが私にどういうものか、
あなたは知っているの？
情愛のないあなたに
どうしてそれが分かりましょう！
この指環は私にとって
ヴァルハルの喜びよりも、
永遠の神の名声よりも大切なのです。
その明るい黄金のきらめき、
気高い光の輝きは、
私にとって
すべての神々の永遠に続く
幸せよりも価値があるのです！
この指環からは清らかにジークフリート
の愛が輝いているのですから。
ジークフリートの愛が！

O ließ' sich die Wonne dir sagen! この喜びがあなたに分かったら!
 Sie — wahr mir der Reif. 指環にはそれが保たれているのです。

ブリュンヒルデが今自分の指にはめている指環は、ジークフリートからの贈り物、つまり、ジークフリートの愛の象徴である。長い眠りから目覚めて、愛に生きようと決意したブリュンヒルデにしてみれば、そのジークフリートの愛の象徴をライン河の中へ投げ捨てることなど決してできない。今や指環は彼女にとって永遠に輝く神々の栄光よりも価値があるのである。「その愛の象徴を決して捨てはしない、たとえ輝く華麗なヴァルハラが崩れて廃墟になろうとも、この愛を奪い取らないでほしい」ということを神々に伝えるよう言い渡すと、ヴァルトラウテは絶望してその場を立ち去ってしまうのである。ヴァルトラウテがブリュンヒルデを訪問して警告に及ぶこの場面は、素材のニーベルンゲン伝説にはどこにも見出されず、ヴァーグナーが自由に創作した場面であり、それだけにヴァーグナーの意図がよりよく理解される場面である。ジークフリートの死は今や神々の没落と平行して展開されていくのである。

ヴォータンが罪を犯したように、ジークフリートもまた、忘れ薬を飲まされているとはいえ、知らぬ間に罪を犯してしまうのが次の場面においてである。ヴァルトラウテが去って、夕方となり、ブリュンヒルデは深い所から火の光が次第に明るく輝いてくるのに見入っている。炎はだんだんと燃え盛り、最後には岩山の縁をなめ尽くしてしまうと、深い所からなつかしい角笛の響きが聞こえてくる。ブリュンヒルデは熱狂して飛び起き、ジークフリートを出迎えようとして岩山の縁に急ぐが、英雄は頭に隠れ頭巾を被り、ジークフリートの姿ではなかったので、彼女は驚き退いてしまう。言葉もなく驚いて見つめている彼女に向かって侵入者は、次のように言う。

Brünnhild'! Ein Freier kam, ブリュンヒルデよ! 一人の求婚者が
 den dein Feuer nicht geschreckt. お前の火を恐れずにやって来たのだ!
 Dich verb ich nun zum Weib: 私はお前を妻にしたい。
 du folge willig mir! 喜んで私について来るのだ!

侵入した男が力づくで征服するつもりであることを知ると、ブリュンヒルデは一瞬「妖怪が岩山に現れ」、自分を「ズタズタに引き裂くために驚が飛んで来た」と思って、恐怖に襲われてしまう。「恐ろしい人よ、あなたは誰ですか」と彼女が尋ねると、男は「ギービヒ家の者で、グンターという英雄」と名乗っ

て、自分に従ってついて来るよう強要する。『ヴォルスンガ・サガ』ではこの場面でブリュンヒルトは何の抵抗もしないでグシナル姿の男の要求に従っている¹⁵⁾のに対して、ヴァーグナーの作品ではブリュンヒルデは激しく抵抗している。この点でグンテル姿のジークフリートがブリュンヒルトと争う『ニーベルンゲンの歌』(665-77詩節)に通じるところもあると言えるが、しかし、ヴァーグナーではブリュンヒルデは指環でもって激しく抵抗するのであり、その指環に大きな意味を込めている点で著しく異なる。指環はブリュンヒルデにとってジークフリートへの操を意味している。隠れ頭巾の男が近くに歩み寄って彼女との結び付きを強要すると、ブリュンヒルデは指環を威嚇的に突き出して、抵抗しながらこう言う。

Bleib fern! Fürchte dies Zeichen! 近づくな! このしるしを恐れよ!
 Zur Schande zwingt du mich nicht, この指環が私を護ってくれる限り、
 solange der Ring mich beschützt. あなたは私を辱めることはできない。

指環はジークフリートへの貞節の証しであり、ブリュンヒルデにとっては「鋼鉄よりも強い」力をも与えてくれるものである。「決してお前はこれを奪い取れはしない!」と言って、必死に抵抗の姿勢を見せるが、しかし隠れ頭巾の男には指環は恐怖を抱かせるものではなく、反対に「奪い取れと言わんばかりに指環を見せてくれている」に過ぎない。男は彼女に襲いかかって、二人は激しく格闘を続ける。ついに男はブリュンヒルデの手をつかんで、指から指環を抜き取る。彼女は激しい叫び声を上げる。指環を奪い取られたことは彼女にとっては操を奪い取られたことをも意味している。相手が勝利を宣言すると、ブリュンヒルデはもはや身を防^{すべ}ぐ術がないことを悟る。男が命令する動作で彼女を追い立てると、彼女は身震いしながら、よろよろと部屋の中へ入って行く。しかし、このとき隠れ頭巾の男ジークフリートは剣を引き抜いて、こう叫ぶ。

Nun, Notung, zeuge du,	さあ、ノートゥングよ、私が礼儀
daß ich in Züchten warb.	正しく求婚したことの証人となれ!
Die Treue während dem Bruder,	義兄に忠誠を示しつつ、
trenne mich von seiner Braut!	彼の花嫁から私を隔てておくれ!

15) 菅原邦城訳：前掲書87頁参照。

抜き身の剣を二人の間に置くことは、ジークフリートが花嫁に手を触れないままであることを意味しており¹⁶⁾、グンターへの忠誠を守ることを言い表している。ヴァーグナーの台本ではこのあとト書きで「彼はブリュンヒルデのあとをついて行く」とあるだけで、そのほかには何の説明もないが、部屋の中でジークフリートは二人の間にその抜き身の剣を置くことでグンターに対して忠誠を守ったと推測される。しかし、グンターへの忠誠を守ったにせよ、ジークフリートはブリュンヒルデに対して不実を働いたことだけは確かである。たとえそれが忘れ薬のせいであったにせよ、ジークフリートはここでヴォータンと同じように罪を犯したこととなり、それがために最後には滅び去らねばならない運命にあるのである。

Ⅲ. ブリュンヒルデの仕返し — 第二幕 —

こうしてグンターのブリュンヒルデへの求婚はハーゲンの策略通りに実現されたのであるが、このような陰謀を企てたハーゲンの魂胆が明らかにされているのが第二幕冒頭においてである。夜、ギービヒ家の柱にもたれかかって眠っているハーゲンの前に父アルベリヒが現れて、父子の間で交わされるこの「不気味な夢魔的対話」は、従来のニーベルンゲン伝承においてはどこにも見出されない、ヴァーグナー独自の創作部分であり、それだけにヴァーグナーの意図がよりよく理解される場面であると言ってよいであろう。

まずこの父子の対話からハーゲンはアルベリヒの策略に屈した女から生まれたことが明らかにされる。ハーゲンはその出自に強い劣等感を抱き、陰鬱で、決して喜びを味わうこともなく、陽気な者たちを常に憎んでいる。「陽気な者たち」とは異父兄弟をも含めた陽気な者たち一般を指しているが、なかでもまず第一にヴォータンが儲けたヴェルズング一族を意味していることは言うまでもない。ヴォータンから指環を奪われて「喜びもなく、苦しみを負わされた」父アルベリヒも、この「夢魔的対話」の中で息子ハーゲンに「陽気な者たち」を憎むようけしかけて、ヴェルズング族を打ち倒すよう励ますのである。ヴァーグナーにおけるハーゲンはアルベリヒの憎悪をそのまま受け継いでこの世に生まれ出てきたのであり、『ニーベルンゲンの歌』においてのようにヴォルムス

16) 抜き身の剣を男女の間に置くという行為は、貞操を大切に守るということの象徴である。この抜き身の剣のモチーフは、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタンとイゾルデ』（1210年頃）などにも用いられている。

繁栄のためにニーベルンゲンの財宝をねらうのではない。父アルベリヒから受け継いだ「粘り強い憎しみ」から指環を取り戻し、世界を掌握して、ヴェルズング族とヴォータンをあざ笑うため、つまりは「陽気な者たち」への復讐のためなのである。父アルベリヒとヴォータンの争いは今や息子ハーゲンとジークフリートの戦いとなったのであり、『神々の黄昏』においては二つの戦いが折り重なって展開されていることが確認されよう。

こうして父アルベリヒの憎しみを受け継いだハーゲンが眠りながら待ち受けているところへジークフリートが戻って来る。ハーゲンを起こしてジークフリートは、新郎新婦がゆっくりと船でこちらに向かっていることを報告する。ハーゲンの叫びでグートルーネも館の中から出て来て、二人はジークフリートの報告を聞くのであるが、この場面は『ヴォルスンガ・サガ』には見出されず、『ニーベルンゲンの歌』においてジークフリートが先触れの使者として一足先にヴォルムスに到着した場面（542-62詩節）を素材にしたものと推定される。もちろん異なる点もいくつか指摘されるが、ジークフリートがハーゲンに操られている点では両作品とも同じである。ヴァーグナーにおいてもジークフリートは、ハーゲンの策略に乗せられているとも気づかずにブリュンヒルデの岩山での手柄話を話して聞かせてから、新郎新婦を出迎える準備をしてくれるようにと依頼するのである。

ジークフリートの報告を受けたハーゲンは、高台に登ってギービヒ家の家臣たちを呼び集めて、グンターとブリュンヒルデを出迎える準備を整えさせ、最後に数人の家臣のところ近づいて、「女主人にやさしくして、彼女に忠実に手を貸すのだ。彼女が苦しみに見舞われたら、ただちに復讐するのだ」と命じる。ハーゲンはこれから何らかのいざこざが起きることをすでに予想しているのであり、グートルーネとともに楽しげに館に入って行く陽気なジークフリートとは対照的である。

ハーゲンの予想通り、新郎新婦がギービヒ家の館に到着した瞬間から、不穏な雰囲気漂っている。この点で華やかな歓迎の様子が展開される『ニーベルンゲンの歌』（579-602詩節）とはかなり異なっている。ヴァーグナーの作品では、一同が歓声を上げる中、グンターは厳かにブリュンヒルデの手を取って案内するが、彼女は青ざめた顔を伏せたままなのである。グンターによってギービヒ一族の面々に紹介されても、彼女は決して目を上げようとしない。ジークフリートがグートルーネを伴って館の中から出て来て、その名前がグンターによって呼ばれたとき、ブリュンヒルデは初めて驚いて目を上げる。目の前にジークフリートを認め、彼がグートルーネと結婚することを耳にすると、ブリュン

ヒルデはよろめいて倒れそうになる。この場面は『ニーベルンゲンの歌』でいえば、ブリュンヒルトがジークフリートとクリエムヒルトの結婚を知って、「口惜しい涙」を流す場面（618-24詩節）に相当すると考えられるが、そこではジークフリートとブリュンヒルトの婚約は前提とされていないので、詩人は苦しまぎれにそのブリュンヒルトの涙を身分違いの結婚による侮辱として説明している（620詩節）だけである。これに対してヴァーグナーの作品では、ジークフリートがブリュンヒルデと愛で結ばれていたことは周知の事実である。それだけにブリュンヒルデは「ジークフリートが自分を知らない」ことで、すっかりと心を乱している。彼女の心は、ジークフリートの指に指環を見つけたとき、さらに激しく揺れ動く。それはグンターが強引に力づくで彼女から奪い取ったはずのものだからである。極度の興奮を無理やり押さえつけながら、ブリュンヒルデはジークフリートにその指環をどのようにしてグンターから貰い受けたのかと尋ねる。これに対してジークフリートが「それは彼から受け取ったものではない」と答えれば、グンターも「指環など彼には与えていない」と答えるので、ブリュンヒルデはグンターに「あなたが私から奪った指環はどこに隠したのですか」と詰問する。グンターはひどくうろたえて黙っているばかりなので、ブリュンヒルデは欺きを察して、激しく跳び上がってジークフリートを責めて言う。

Ha! — Dieser war es,
der mir den Ring entriß.
Siegfried, der trugvolle Dieb!

ああ! — 私から指環をもぎ取った
のは、この男だったのです。欺きの
盗人ジークフリートだったのです!

一同は興味深そうにジークフリートを見つめているが、彼は指環を見つめたまま、遠い昔を思い出すように、うっとりとして、次のように答える。

Von keinem Weib
kam mir der Reif;
noch war's ein Weib,
dem ich ihn abgewann:
genau erkenn ich
des Kampfes Lohn,
der vor Neidhöhl'
einst ich bestand,
als den starken Wurm ich erschlug.

この指環は
女から手に入れたものではない。
私がこれを勝ち得たのは
女からではない。
戦いの報酬で、
私はよく知っている。
かつて強い大蛇を打ち倒したとき、
妬みの洞穴の前で
勝ち得たものなのだ。

この場面でジークフリートは、グンターの姿でブリュンヒルデから指環を奪い取った前日の自分の行動をすでに忘れ果てているのであろうか。ジークフリートは、ハーゲンとグートルーネに報告していることからして、少なくともブリュンヒルデをグンターに引き渡したことは覚えているのだから、忘れ薬のために前日の出来事を忘れていたとは考えられない。とすれば、ジークフリートはそのときとっさに機転をきかせて遠い昔のことを語って、その場をうまく言い逃れようとしているのであろうか。あるいは前日の出来事のうち指環を奪い取った瞬間だけは特殊な忘れ薬のために記憶に残っていないのであろうか。いずれにしても不可解な場面と言わざるをえないが、この場面は従来のニーベルンゲン伝承ではどのように語られてきたのであろうか。

まず北欧の『ヴォルスンガ・サガ』では、シグルズは以前に与えていたアンドヴァリの腕輪をブリュンヒルトの手から抜き取って、ファーヴニルの遺産の中から別の腕輪を与えて、アンドヴァリの腕輪はのちに妻グズルーンに贈ることになっている¹⁷⁾。同じ北欧の『スノリのエツダ』では逆にジグルトはブリュンヒルトに後朝の贈り物として黄金の指環（アンドヴァリの指環）を贈り、彼女の手から別の指環を思い出の品として抜き取った¹⁸⁾とされている。これらに対して同じ北欧でも比較的新しい伝説内容を伝えている『ティードレクス・サガ』では、指環を抜き取るのは結婚式後に二度目の手助けをする場面に移されて、シグルズはブリュンヒルトの指から黄金の指環を抜き取り、別のものをはめた¹⁹⁾と簡単に語られているだけである。これと同じくドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』でも、指環を抜き取る行為は二度目の手助けの場面に移されており、そこではジークフリートはブリュンヒルトの手から黄金の指環を抜き取るが、彼女はそれにまったく気づかなかった（679詩節）とされている。しかし、その指環をのちに妻クリエムヒルトに贈り物として与えてしまう（684詩節）点では北欧の諸作品と同じである。あとで展開される両王妃口論のためにはその指環（腕輪）は妻クリエムヒルト（グズルーン、グートルーン、グリームヒルト）に渡っていなければならないのである。

17) 菅原邦城訳：前掲書87-8頁参照。ちなみに、この作品を素材にしたド・ラ・モット・フケーの『大蛇殺しのジグルト』でも、多少の差はあれ、ほぼ同じと言ってよからう。（拙稿：ド・ラ・モット・フケー作『大蛇殺しのジグルト』徳島大学総合科学部「言語文化研究」第6巻101頁参照）

18) 拙稿：スノリにおけるニーベルンゲン伝説 徳島大学総合科学部「言語文化研究」第7巻56頁参照。

19) Vgl. Fine ERICHSEN (Übertragen): a. a. O., S. 268.

これら従来のニーベルンゲン伝説に対してヴァーグナーの作品では伝統的な両婦人の口論は削除されているので、ジークフリート暗殺の動機づけのためにその指環は妻グートルーネの手に渡ってしまっていてはならない。どうしてもジークフリートが所持していなければならない。そのために不可解な場面の一つとなったのであるが、私の意見によれば、この場面は『ニーベルンゲンの歌』の裏返しと考えられはしないだろうか。すなわち、『ニーベルンゲンの歌』では、上述の通り、ブリュンヒルトは指環を抜き取られたことにまったく気づかなかったが、ヴァーグナーではそれと裏返しのかたちでジークフリートの方がたちまちその指環のことを忘れてしまったと考えられるのである。第一幕でアルベリヒが述べているように、ジークフリートは「指環の価値を知らず、その力を全然利用しない」のであり、指環にはまったく関心がないように思われるが、この場面でもジークフリートは無意識のうちに指環を自分の指にはめていたのである。それをブリュンヒルデに見つけられて詰問されたとき、彼は本能的に大蛇退治でそれを獲得したことを思い出したのであろう。しかし、それをブリュンヒルデに見つけられてしまい、のちに災いが起きる結果となることを考えると、無思慮な行動と言わなければならない。

一方、ハーゲンにとっても指環がジークフリートの指にあることは予想外のことであったが、しかし策略に長けたハーゲンはそれをうまくとらえるのである。ハーゲンは二人の間に割って入り、彼女がグンターに与えた指環なら、ジークフリートはそれを欺きでもって勝ち得たと主張し、ジークフリートはその償いをしなければならぬと訴えるのである。ジークフリートが忘れ薬のために自分のことを忘れ果てているとは知らないブリュンヒルデは、ジークフリートに裏切られたと思って恐ろしい悲嘆の声で欺きを訴えながら、次のように「真相」を打ち明ける。

Wisset denn alle :
nicht ihm —
dem Manne dort
bin ich vermählt.

．．．

Er zwang mir Lust
und Liebe ab.

皆さん、聞いてください。
彼ではなく —
あそこの人と
私は結婚したのです。

．．．

彼は私から喜びと
愛を奪い取ったのです。

ジークフリートが妬みの洞穴の前で指環を勝ち得たという話が偽りでなかっ

たように、このブリュンヒルデの言葉も、長い眠りのあと二人は結ばれたという限りにおいては決して偽りではない。しかし、これが前日の出来事として語られているとすれば、一同にとっては衝撃的な言葉である。自らが信義を破っていないことを証明しなければならないジークフリートは、次のように事の次第を打ち明ける。

Hört, ob ich Treue brach !	私が誠実を破ったか、聞いてくれ！
Blutbrüderschaft	血の兄弟の契りを
hab ich Gunther geschworen :	私はグンターに誓った。
Notung, das werthe Schwert,	高貴な剣ノートゥングが
wahrte der Treue Eid ;	その誠実の誓いを守ってくれた。
mich trennte seine Schärfe	その鋭い刃が私をこの悲しげな
von diesem traur'gen Weib.	女性から隔てていたのだ。

この言葉によってジークフリートがグンターの求婚に手を貸したことが暴露されたと言ってもよいであろう。男たちの欺きを悟ったブリュンヒルデは、今や同じように欺きでもって仕返しをしようとする。

Wohl kenn ich seine Schärfe,	剣の鋭さを私はよく知っています。
doch kenn auch die Scheide,	その鞘のことも知っています。
darin so wonnig	その持ち主が愛する人に
ruht' an der Wand	求婚したとき、
Notung, der treue Freund,	誠実な友ノートゥングは
als die Traute sein Herr	喜びに満ちて鞘に収まり、
sich gefreit.	壁にかかっていたのです。

このブリュンヒルデの打ち明け話は『ヴォルスンガ・サガ』でいえば、両王妃口論でひどい恥辱を受けたブリュンヒルドがグンナルに向かって、「私は生きていたくありません。シグルズ様は、あなたが私の床におこしになったとき、私だけでなくあなたまでも欺いたのですから」という嘘偽りの言葉²⁰⁾に相当すると考えてよいであろう。この偽りの打ち明け話によって『ヴォルスンガ・サガ』におけるグンナルがひどく悩み出したように、ヴァーグナーにおけるグン

20) 菅原邦城訳：前掲書103頁参照。

ターも誠実な兄弟の契りを裏切られたこととなったのである。さらにグートルーネも同様に裏切られる結果となったのであり、彼女はブリュンヒルデの主張が偽りであることを証明するようジークフリートに迫る。ジークフリートは今や身の潔白を証明するためには誓いを立てるほかはない。誓いのために武器を要求するや、すかさず槍を突き出したのがハーゲンである。ジークフリートはその槍の穂先に右手の二本の指をあてて、自分の誓いが偽りであったら、この槍にかかって死ぬことにしようと言って、兄弟の誓いを破っていないことを誓う。するとブリュンヒルデは怒って割り込んできて、ジークフリートの手を槍から払いのけ、自分の手でその槍の穂先に触れて、「この男は誓いを破り、今も偽りの誓いを立てたのだから、この神聖な槍が彼を倒すように！」と叫ぶ。のちにジークフリートがこのハーゲンの槍に背中を突き刺されて死ぬ運命にあることを考慮に入れると、やはりジークフリートは「兄弟の契り」を破ったことになるのであろうか。真相は謎に包まれているが、私の意見によれば、ジークフリートは決して兄弟の誓いを破ってはいない。といて、ブリュンヒルデもまったくでたらめな作り話をしてしているのではない。上記の打ち明け話も、長い眠りから目覚めたのちにジークフリートと結ばれたときのことを語っている限りにおいて真実である。二人の話には目覚めのあとの愛の生活とグンター求婚の時期が互いに交錯しているだけであり、二人はいずれも真実を語っているのである。このような紛糾に陥ったのも、すべてはハーゲンの忘れ薬の魔力によるものである。しかし、ジークフリートはブリュンヒルデが呼び起こしたと思っている「妖怪の邪悪な策略」の正体を知らない。彼はグンターのすぐそばに歩み寄って、「彼女を騙せなかったのは残念だ。隠れ頭巾が自分を半分しか隠せなかったように思われる。しかし女の怒りはすぐにおさまるものだ」と宥めて、陽気に手をグートルーネのまわりに巻きつけて、結婚の宴のために館の中へ入って行くのである。家臣たちや婦人たちもそのあとをついて行く。

その場に残ったのは、ブリュンヒルデとグンターとハーゲンの三人である。グンターはひどい恥辱を受けて、沈み込んでいる。ブリュンヒルデはしばらくの間ジークフリートとグートルーネを痛ましく眺め、それから考えにふけてがっくりと頭を沈める。じっと思いを凝らすブリュンヒルデも、ジークフリートと同様に、ここに隠されている「妖怪の策略」の正体を知らない。彼女にとって一体何が嘆かわしいのであろうか。それについては彼女自身が次のように明らかにしている。

wies ich ihm zu !	私は彼に授けてしまった！
In seiner Macht	その力で
hält er die Magd ;	彼はあの小娘を手に入れ、
in seinen Banden	獲物を捕らえて
faßt er die Beute,	縛りつけた。
die, jammernd ob ihrer Schmach,	恥辱ゆえに悲しむその獲物を
jauchzend der Reiche verschenkt !	彼はいい気で他人に与えたのだ！

ブリュンヒルデにとって真の意味で嘆かわしいのは、彼女のすべての知識をもらい受けたジークフリートがその力でもってグートルーネを手に入れ、妻である自分を獲物同然に他人に譲り渡してしまったことなのである。彼女はなんとしてもこの「絆」を剣でもって断ち切りたい。そのときハーゲンが彼女に近づき、揺れ動く彼女の心をうまくとらえて、ジークフリート暗殺を唆すのである。

ハーゲンがブリュンヒルデを唆すこの場面は、『ニーベルンゲンの歌』でいえば、ハゲネが王妃プリュンヒルトの恥辱をそそぐという名目で、ジークフリート暗殺をグンテル王に唆してから、クリエムヒルトを訪れてジークフリートの弱点を巧みに聞き出す場面（891-906詩節）に相当すると考えられるが、もちろん相違も認められる。最も著しい相違は、ヴァーグナーの作品においてはハーゲンがジークフリートの弱点をグートルーネ（クリエムヒルト）からではなく、ブリュンヒルデ（プリュンヒルト）から聞き出す点である。ハーゲンは、『ニーベルンゲンの歌』におけるクリエムヒルトと同じように動揺するブリュンヒルデの心を巧みにとらえて、ジークフリートの弱点を聞き出すことに成功するのである。「どんな武器も彼を傷つけえないのか」という問いに、ブリュンヒルデは答えて言う。

Im Kampf nicht ; doch	戦いでは傷つけられません。しかし、
träfst du im Rücken ihn. . .	背中なら彼を刺せるかも知れません。
Niemals, das wußt' ich,	決して彼は敵から逃げないことを
wich' er dem Feind,	私は知っていました。
nie reicht' er fliehend	決して彼は逃げて背中を見せる
ihm den Rücken :	ことはありませんでしたから、
an ihm drum spart'	私は背中には魔術を
ich den Segen.	かけなかったのです。

『ニーベルンゲンの歌』ではジークフリートが竜の血を浴びた際、一枚の菩提樹の葉が落ちてきた両肩の間がジークフリートの急所となったのであったが、『神々の黄昏』ではブリュンヒルデが決して敵から逃げることをしないジークフリートの背中に魔術をかけなかったとしたのは、ヴァーグナー独自の創作である。しかし、ハーゲンがこのようにジークフリートの弱点を聞き出してまさにその急所をねらうことにしたのは、『ニーベルンゲンの歌』（891-906詩節）と同じである。ハーゲンはジークフリートの弱点を聞き出すと、すばやくグンターに目を向けて、思い悩むグンターにジークフリート殺害を唆す。グンターは恐怖にとらわれて、「彼（ジークフリート）は契りを破ったのか？」と尋ねたり、「彼は私を裏切ったのか？」と念を押したりして逡巡していると、ブリュンヒルデが怒りをあらわにして次のようにグンターを説き伏せる。

Dich verriet er,	彼はあなたを裏切り、
und mich verrietet ihr alle !	あなた方皆を裏切ったのです！
Wär' ich gerecht,	私が正当なら、
alles Blut der Welt	世界のすべての血でも
büßte mir nicht eure Schuld !	あなた方の罪を贖えません！
Doch des <i>einen</i> Tod	すべての人に代わって
taugt mir für alle :	一人だけ死ぬのが役に立つのです。
Siegfried falle	彼自身とあなた方の償いのために
zur Sühne für sich und euch !	ジークフリートを倒すのです！

このブリュンヒルデの説得に加えて、ハーゲンはさらにグンターを唆して、ジークフリートから指環を奪い取ったら大きな権力が自分のものとなると主張する。ハーゲンはもちろん指環を自分のものにしようと企んで、巧みにグンターを唆すのである。それでもグンターはジークフリートの花嫁とした妹のことを気遣って、「妹にどのように顔向けしたらよいのか？」と、まだなお心配である。「明日、狩りに出かけて、・・・猪が彼を殺したことにするのだ」と、これまたハーゲンに唆されて、グンターはやっとジークフリート暗殺を決意するのである。こうして三人は三重唱のうちにジークフリート殺害を誓い合うのであるが、その三重唱の中でもハーゲンの歌詞は次のようになっている。

Sterb er dahin,	彼は死んでいくのだ、
der strahlende Held !	輝く英雄よ！

Mein ist der Hort,	財宝はわしのものであり、
mir muß er gehören.	わしのものでなければならぬ。
Drum sei der Reif	だから指環を
ihm entrissen.	彼からもぎ取るのだ。

ハーゲンが徹底して指環に執着していることが明らかである。ハーゲンにとってジークフリートの死は彼から指環をもぎ取るためのものであることが容易に理解されよう。妖怪アルベリヒの息子ハーゲンは父の「憎悪」を受け継いで、その指環を奪い返すことによって、「陽気な一族」に復讐を遂げようとしているのである。

IV. ジークフリート暗殺と神々の黄昏 — 第三幕 —

その妖怪アルベリヒの「憎悪」に由来するハーゲンの復讐がついに実行に移されるのが第三幕においてである。第三幕冒頭の舞台はライン河畔の森や岩のある、荒々しい低地で、三人のラインの乙女たちが水面に浮かび出て、輪を描いて泳ぎ回っている。その場に現れたのがジークフリートである。彼はグートルーネと結婚式を挙げた翌日、ギービヒ家の男たちと狩りに出かけ、熊を追っているうちにその足跡を見失い、この場に辿り着いたのである。獣を隠した妖怪に向かって、ジークフリートが獣をどこの岩陰に隠したのかと叫ぶと、三人の乙女たちは水面に姿を現す。そのうちの一人が「その獣を差し出したら、あなたは私たちに何をくれるの？」と尋ねると、ジークフリートは「望むものを頼むがいい」と答えたので、三人の乙女たちはジークフリートの指に輝いている指環を所望する。しかし、指環はジークフリートにとっては大蛇を倒して獲得した品物であり、貧弱な熊との交換のためにそれを差し出すことをためらっていると、ジークフリートは三人の乙女たちからからかわれたうえに「けち」呼ばわりされてしまう。この侮辱に我慢することができずに、彼は彼女らに指環を与えることを決心する。ところが、再び水面に浮かび出た三人の乙女たちは真剣な目つきをして、改まった面持ちで、その指環に秘められた災いを語り始めるのである。すなわち、ラインの黄金から指環を鍛え上げておきながら、それをヴォータンに奪い取られてしまった男（アルベリヒ）について、次のように話して聞かせるのである。

Der verfluchte ihn,	その男が呪いをかけたのです、
---------------------	----------------

in fernster Zeit	それを持っている者には
zu zeugen den Tod	遠い未来でも
dem, der ihn trüg'.	死をもたらすようにと。

この男の呪いによって、ジークフリート自身が打ち倒した大蛇と同じように、ジークフリートも今日中に打ち倒されることを乙女たちは予言し、自分たちと指環を交換しないなら、それを深いライン河に沈めてしまうように警告する。「ライン河の波だけがその呪いを清めてくれる」というのである。しかし、この脅しが逆にジークフリートを大胆にさせる。「夜毎に綱を編んでいるノルンたちが呪いを運命の綱の中に編み込んだのです」と三人の乙女たちが警告しても、ジークフリートは「ノートゥングでそれを断ち切ってみせよう！」と豪語して、次のように言うのである。

Der Welt Erbe	世界の相続権を
gewänne mir ein Ring :	指環は私に授けてくれるというが、
für der Minne Gunst	愛を得られるならば
miß ich ihn gern ;	それを喜んで手放してもよい。
ich geb ihn euch,	私に喜びを与えてくれるなら、
gönnt ihr mir Lust.	指環をお前たちに与えよう。
Doch bedroht ihr mir	しかしお前たちが
Leben und Leib :	命と身体のことを脅かして、
faßte er nicht	指環を指に
eines Fingers Wert,	はめてはならないと言うのなら、
den Reif entringt ihr mir nicht !	指環は私からもらえはしないぞ！

一度は彼女らに指環を与えるつもりになっていたのに、ジークフリートは三人のラインの乙女たちからその指環に秘められた呪いを聞き知るや否や、こうして指環を手渡すことをやめてしまうのである。彼はさらに命と身体を潔く捨てるつもりである決意さえ見せるが、この恐れを知らぬということこそが、やがて彼の破滅の原因ともなるのである。三人の乙女たちは失望して、「気高い女性が今日中にも邪悪なあなたから受け継ぐことになるでしょう」と予言して、「彼女なら私たちのことをよく聞いてくれるはず」と思って、彼女のもとへ去って行ってしまふ。彼女たちの言う「気高い女性」とはもちろんブリュンヒルデのことであり、三人のラインの乙女たちはこうしてその後起きる災い

を予言するという重要な役割を果たしているのである。この第三幕冒頭部分における三人のラインの乙女たちの役割は素材の『ヴォルスンガ・サガ』や『ニーベルンゲンの歌』には見出されない、ヴァーグナー独自の創作によるもので、序幕における三人のノルンたちの役割と対をなすものと考えることができよう。序幕において三人のノルンたちによって「神々の黄昏」がほのめかされているように、第三幕冒頭においては三人のラインの乙女たちによって「ジークフリートの暗殺」が予言されているのである。

続く場面がいよいよそのジークフリート暗殺にまつわる場面である。このジークフリート暗殺についてはニーベルンゲン伝説では大きく二つのタイプ——ベッドの中での暗殺と森の中での暗殺——に分けられる。『ヴォルスンガ・サガ』やド・ラ・モット・フケーの戯曲では前者のタイプに従って、しかもグットルムによって暗殺されるのに対して、『ティードレクス・サガ』や『ニーベルンゲンの歌』ではジグルト（ジーフリト）が森へ狩りに出かけた際にヘゲニ（ハゲネ）によって暗殺されることになっている。ヴァーグナーが素材としたのは明らかに後者のタイプに属する『ニーベルンゲンの歌』であるが、ヴァーグナーにおけるジークフリート暗殺場面は『ニーベルンゲンの歌』とはことごとく裏返しのかたちで展開されていることが明らかとなってくる。

まず『ニーベルンゲンの歌』ではジーフリトは狩りで多くの獲物を射止め、最後には熊を生け捕りにして称賛されたりもするが、ヴァーグナーでは、すでに述べたように、熊を追っているうちにライン河畔の低地に迷い込んでしまい、獲物の行方を見失ってしまう有様である。やがてそこへギービヒ家の男たちがやって来て、ハーゲンの提案によってその場所で食事の準備をすることになっても、ジークフリートは獲物を提供することができない。「獲物なしなのか？」というハーゲンの問いに、ジークフリートは自分の前に現れたのは水の生き物だけで、「その三羽の水鳥たちがあそこのライン河で、自分が今日中にも殺されると歌っていたよ」と答える。この言葉にグンターはギクリとするのであり、ヴァーグナーは『ニーベルンゲンの歌』とは裏返しのかたちでうまく自らの作品構造に作り直していることが容易に窺えよう。

その場で重要な役割を果たす飲み物にしても、『ニーベルンゲンの歌』ではハゲネが策略からわざとワインをシュペサルトの方へ送っていたためその場にはない（967詩節）のに対して、ヴァーグナーではハーゲンが男たちに持参した酒の革袋を取り出すように命じて、「喉が渴いた」と言うジークフリートにハーゲン自身がそれを差し出すのであり、『ニーベルンゲンの歌』とは裏返しの関係である。従って、ヴァーグナーの作品においては泉のほとりに水を飲み

に行く場面が不必要となり、その代わりに展開されるのがジークフリート自身による語りである。グンターがあまりにもふさぎ込んでいるので、ジークフリートは自らの若き日の冒険を語って聞かせるのである。これがいわゆる「叙事的語り」であり、その語りの中からジークフリートは自らのアイデンティティを取り戻すのであって、ヴァーグナーの独創による重要な場面である。

ジークフリートはまずミーメという名の侏儒によって育てられたことから語り始める。鍛冶屋ミーメはこの子供がいつの日か勇敢に成長したら、森で財宝を護っている大蛇を退治してもらうことを目論んでいたのである。鍛冶屋はジークフリートに鋼鉄を鍛えることや鉱石を溶かすことを教えたが、ジークフリートはその鍛冶屋にはできなかったことを成し遂げた。すなわち、父の遺した鋼鉄の破片を溶接して新たに名剣ノートゥングを作り上げたのである。ジークフリートは侏儒ミーメの案内で森へ行き、そこで大蛇ファフナーを倒した。そのとき彼は大蛇の血で指を火傷してしまい、冷やすために指を口に入れたところ、舌に血がつくや否や、小鳥たちが歌っていることが理解できるようになった。その小鳥の助言に従って、ジークフリートは洞穴の中で財宝を見つけ、指環と隠れ頭巾を獲得した。そののち再び小鳥が忠告をしてくれ、それに従って彼は不誠実なミーメを名剣ノートゥングで打ちのめしたのである。

ここまでの経過を語ったところで、ハーゲンが角杯に新たに酒を満たし、その中に薬草の汁を落とす。それは記憶を取り戻す薬であった。ハーゲンによって差し出されたその角杯を飲んだジークフリートは、次第に遠い過去のことを鮮明に思い出す。すなわち、忘れ果てていたブリュンヒルデのことを思い出して、語り続ける。小鳥が三度目にジークフリートに教えたのは「すばらしい女性」のことで、「彼女は高い岩山で眠っていて、その広間の周りには炎が燃えている。その炎を通り抜けて、その花嫁を目覚めさせたら、ブリュンヒルデは彼のもの！」という。この小鳥の助言に従ってそこへ出かけて行った折りのことをジークフリートは、次のように語るのである。

Rasch ohne Zögern
zog ich nun aus,
bis den feurigen Fels ich traf :
die Lohe durchschritt ich
und fand zum Lohn
schlafend ein wonniges Weib
in lichter Waffen Gewand.

ためらうことなく急いで
私は出かけて行って、
炎の岩山に辿り着いた。
炎を通り抜けると、
私は報酬として
愛らしい女性が輝く武装をしたまま
眠っているのを見つけた。

Den Helm löst' ich	私はそのすばらしい乙女の
der herrlichen Maid ;	兜を解いて、口づけで
mein Kuß erweckte sie kühn :	彼女を大胆にも目覚めさせた。
oh, wie mich brünstig da umschlang	ああ、美しいブリュンヒルデの腕は
der schönen Brünnhilde Arm !	なんと熱烈に抱きついてきたことか！

ジークフリートはこうして今やすっかりとブリュンヒルデに関する過去の記憶を取り戻したのであるが、この話を聞いてひどく驚き、跳び上がったのはグンターである。彼はこのとき初めてジークフリートとブリュンヒルデについての真相を悟ったのである。そのとき二羽のカラスが藪の中から飛び立つ。カラスはヴォータンが使いに出していたもので、今やヴォータンに破滅が近づいたことを知らせるために飛び立ったのである。ハーゲンは「このカラスのささやきもお前に分かるのか」と言いながら、ジークフリートの注意をカラスの方に向けさせる。ジークフリートが激しく跳び起き、カラスの方を向いて、ハーゲンに背中を見せたとき、ハーゲンはジークフリートの背中に槍を突き刺すのである。グンターはハーゲンの腕を抑えようとするが、遅過ぎた。ジークフリートは両手で楯を振りかぶり、それでもってハーゲンを打ちのめそうとするが、力が抜けて、楯はうしろに落ち、彼自ら楯の上に倒れてしまう。家来たちに続いてグンターも「ハーゲン、お前は何をしたのだ？」と言って、その行為を咎めると、ハーゲンは「偽りの誓いに復讐をしたのだ！」と答える。ハーゲンはジークフリートが偽りの誓いをしたことを殺害の口実としているが、真意はあくまでもジークフリートの所有する指環強奪にあったことは言うまでもない。従って、ジークフリートの死は偽りの誓いによるものではなく、アルベリヒの指環の呪いによるものと考えなければならないであろう。指環の使い方を知らないかつてのジークフリートにはアルベリヒの呪いも効き目がなかったが、指環の秘密を知ってからはその指環の呪いから逃れることはできなかったのである。ジークフリートは二人の家臣に支えられながら、両眼を開け、その目を輝かせて、最後の歌を歌う。

Brünnhilde,	ブリュンヒルデよ、
heilige Braut !	聖なる花嫁よ！
Wach auf ! Öffne dein Auge !	目覚めよ！瞳を開けよ！
Wer verschloß dich	誰がお前を再び
wieder in Schlaf ?	眠りの中へ閉じ込めたのか？

Wer band dich	誰がお前を恐ろしい
in Schlummer so bang?	まどろみへ陥れたのか?
Der Wecker kam ;	目覚めさせる男がやって来たのだ!
er küßt dich wach,	彼が口づけでお前を目覚めさせる。
und aber der Braut	また花嫁のために
bricht er die Bande :	その縛めを断ち切るのだ。すると
da lacht ihm Brünnhildes Lust !	ブリュンヒルデの喜びがほほ笑む!
Ach! Dieses Auge,	ああ、この瞳よ、
ewig nun offen !	今や永久に開いたままであれ!
Ach, dieses Atems	ああ、この息の
wonniges Wehen !	快い流れ!
Süßes Vergehen,	甘き消滅。
seliges Grauen—	至幸の戦慄。
Brünnhild' bietet mir—Gruß !	ブリュンヒルデが私に挨拶する!

このようにジークフリートはブリュンヒルデのことを思いながら息を引き取るのであり、この場面も『ニーベルンゲンの歌』(996-7詩節)においてジークフリートがクリエムヒルトのことを思いながら死ぬのとは裏返しの関係である。ヴァーグナーはジークフリート暗殺の場面に関しては『ニーベルンゲンの歌』とことごとく裏返しのかたちで展開させているのである。

葬送行進曲の鳴り響く中、ジークフリートの遺骸はギービヒ家の館に向かって運ばれて行くが、そこで夫の帰りを待ち受けていたのはグートルーネである。夜、グートルーネは悪夢に眠りを邪魔され、ジークフリートの馬のいななきとブリュンヒルデの笑い声で目が覚めたのである。しかもブリュンヒルデらしき女性がライン河の岸辺へ歩いて行く姿を見て、彼女は不安でたまらない。しばらくして、ジークフリートの角笛ではなく、ハーゲンの角笛と叫び声を耳にしたときには、彼女の不安はさらにつのる。やがてジークフリートの遺骸を運ぶ行列が館に到着し、ますます不安におびえるグートルーネに向かって、ハーゲンはジークフリートが「野猪の獲物」となって死んだことを伝える。ジークフリートの遺骸を見たグートルーネは、叫び声を上げて遺骸の上にくずおれる。グンターは失神した妹を気遣って、妹に話しかけるが、グートルーネは再び我に返ると、グンターを激しく突きのけて、彼がジークフリートを殺害したのだと責め立てる。真相を知って胸のむかつく思いをしているグンターは、「ハーゲンこそ呪われた猪で、ジークフリートをズタズタに引き裂いたのだ」

と打ち明ける。するとハーゲンは恐ろしい反抗心を示して、次のように自白する。

Ja denn! Ich hab ihn erschlagen,	そうだ！わしが彼を殺したのだ。
Ich, Hagen,	わし、ハーゲンが
schlug ihn zu Tod.	彼を打ち殺したのだ。
Meinem Speer war er gespart,	彼が偽りの誓いを口にしたときの
bei dem er Meineid sprach.	わしの槍に取っておかれたのだ。
Heiliges Beuterecht	神聖な獲物の権利を
hab ich mir nun errungen :	今やわしが勝ち得たのだ。だから
drum fordr' ich hier diesen Ring.	ここでわしがこの指環を要求する。

このハーゲンの自白は、『ニーベルンゲンの歌』後編においてハゲネがフン国でクリエムヒルトに堂々とジークフリート暗殺を打ち明ける場面（1790-1詩節）のヴァリエーションである。しかし、ここではハーゲンが指環を要求している点で『ニーベルンゲンの歌』とは異なる。ヴァーグナーの作品では徹頭徹尾この指環をめぐる争いが展開するのであり、このハーゲンの指環要求に対してグンターが「俺の手に帰したものを決してお前が得るべきではない」と主張すれば、ハーゲンは自らの剣を引き抜いて、「妖怪の遺産をその息子が要求するのだ！」と抵抗する。二人は争い、ついにグンターがハーゲンの一撃で倒れてしまう。この指環をめぐる兄弟喧嘩は『ラインの黄金』第4場における巨人族兄弟の争いを彷彿とさせるものであり、指環の呪いによる争いであることは言うまでもない。しかし、勝利を収めたハーゲンも恐れをなしてしまう。彼がジークフリートの手から指環を抜き取ろうとすると、その手は威嚇するように持ち上がったのである。この場面は『ニーベルンゲンの歌』において殺人者ハゲネがジークフリートの死体に近づいたとき、その死体から新たに血が吹き出した場面（1042-5詩節）のヴァリエーションだと考えることができよう。ヴァーグナーはあらゆるニーベルンゲン伝説の要素を、別のかたちであるにせよ、自らの楽劇の中に織り込むよう努めていることが明らかである。

一同が身震いしながら、金縛りにあったように立ち尽くしているところへ、ブリュンヒルデが登場して、グートルーネと言い争う場面についても『ニーベルンゲンの歌』前編における両王妃口論（815-50詩節）のヴァリエーションと考えることができよう。ラインの乙女たちから真実を聞き知って、知識を取り戻したブリュンヒルデは、今やしっかりとした厳かな姿で前景に歩み出て、一同に騒ぎをやめるよう言い渡すと、グートルーネが床から激しく跳び起きて、

次のように叫ぶ。

Brünnhilde! Neiderboste !	ブリュンヒルデ! 恨みに燃える女!
Du brachtest uns diese Not :	この災いをあなたがもたらし、
die du die Männer	あなたが兄弟たちを
ihm verhetzttest,	彼にけしかけた。
weh, daß du dem Haus genaht !	あなたがこの家に来たのが災いだ!

『ニーベルンゲンの歌』ではブリュンヒルトから口論をしかけてくるのに対して、ヴァーグナーにおいてはグートルーネが喧嘩を煽り立てるのである。このグートルーネの攻撃に対してブリュンヒルデは、冷静に次のように答える。

Armselige, schweig !	あわれな女性よ、黙るのです!
Sein Eheweib warst du nie,	あなたは決して彼の妻ではなかった。
als Buhlerin	情婦としてあなたは
bandest du ihn.	彼を縛り付けただけのこと。
Sein Mannesgemahl bin ich,	彼の本当の妻はこの私です。
der ewige Eide er schwur,	ジークフリートはあなたに会う前に、
eh Siegfried je dich ersah.	私に永遠の誓いを立てていたのです。

『ニーベルンゲンの歌』ではブリュンヒルトがジーフリトの側女そばめだと罵られて、王妃の名誉をひどく傷つけられた(839-40詩節)のに対して、ヴァーグナーではブリュンヒルデが逆にグートルーネを情婦と呼び、自分こそジークフリートの本当の妻であることを主張するのである。この点でもヴァーグナーの作品は『ニーベルンゲンの歌』とは裏返しの関係にあることが明らかである。このブリュンヒルデの打ち明け話によって、ジークフリートがブリュンヒルデの本当の夫であり、忘れ薬で彼女のことを忘れていただけであることを知ったグートルーネは、羞恥のあまりジークフリートから身を離し、悲しみに暮れて、グンターの亡骸の上に身をかがめ、彼女は最後まで身動きしないままである。

『ニーベルンゲンの歌』においてジーフリト暗殺ののち、ブリュンヒルトがいつの間にか舞台から姿を消しているのと同様に、グートルーネも事実上そのまま舞台から姿を消してしまっていると言ってもよいであろう。この点でもヴァーグナーの作品は『ニーベルンゲンの歌』と裏返しの関係にあるのである。

今や舞台を独占するのはブリュンヒルデである。「神々の力」のライトモチー

フが鳴り響くと、彼女は厳かに身を起こして、男女の方を振り向いて、「ラインの岸辺に太い薪を高々と積み重ね」、「ジークフリートの馬をこちらへ連れて来るよう」命令する。その準備が進められている間、ブリュンヒルデは再びジークフリートの死体を見つめると、彼女の顔つきはますます安らかな神々しさを増して、今は亡き愛しいジークフリートの賛辞を次のように歌う。

Wie Sonne lauter	太陽のように明るく
strahlt mir sein Licht :	彼の光は私のために輝いている。
der Reinste war er,	私を裏切った彼は、
der mich verriet !	いとも純粋な人であった。
Die Gattin trügend,	妻を欺いて、
treu dem Freunde,	友に誠実を尽くした人。
von der eignen Trauten,	ただ一人自らにとって大切だった
einzig ihm teuer,	自分自身の愛しい妻から
schied er sich durch sein Schwert.	自らを彼は剣でもって隔てた。
Echter als er	彼以上に純粋に
schwur keiner Eide ;	誓いを誓った者はいない。
treuer als er	彼以上に誠実に
hielt keiner Verträge ;	約束を守った者はいない。
lautrer als er	彼以上に純真に
liebte kein andrer :	愛した者もない。
und doch, alle Eide,	しかし、すべての誓い、
alle Verträge,	すべての約束、
die treueste Liebe	いとも誠実な愛を
trog keiner wie er !	彼ほどに欺いた者もいなかった !

ジークフリートがグンターの姿でブリュンヒルデに求婚した折り、グンターとの契りを破ったのか否かについては謎に包まれていたが、上記のブリュンヒルデの言葉によってジークフリートが友に誠実を尽くしたことが明らかにされている。友グンターとの契りは確かに忠実に守ったが、しかし、それは一方では妻ブリュンヒルデとの誠実な愛を欺いたことをも意味している。たとえ忘れ葉のせいであったにせよ、妻を裏切ったことには変わりはないのである。どうしてこういうことになったのか。ブリュンヒルデは、天を仰ぎながら、自らの苦しみを神々に次のように訴えかける。

O Ihr, der Eide	ああ、誓いの
heilige Hüter !	神聖な守護者たちよ !
Lenkt euren Blick	あなた方の眼差しを私の限りない
auf mein blühendes Leid,	苦しみに注いで、あなた方の
erschaut eure ewige Schuld !	永劫の罪を悟ってください !
Meine Klage hör,	いとも高貴なる神よ、
du hehrster Gott !	私の嘆きを聞いてください !
Durch seine tapferste Tat,	彼の最も勇敢な行為は
dir so tauglich erwünscht,	あなたが切に望んだものなのに、
weihtest du den,	あなたは、それを実行した男を、
der sie gewirkt,	自分の陥るべき呪いへと
dem Fluche, dem du verfilest :	捧げてしまったのです。
mich mußte	このいとも純粋な男は私を裏切る
der Reinste verraten,	運命に追いやられ、それによって
daß wissend würde ein Weib !	この私は悟りを開いたのです !

このブリュンヒルデの言葉は、ジークフリートが神々の永劫の罪の犠牲となったことを明らかにしているという点で注目値する。ジークフリートの死は今や神々の黄昏が近づいていることの証しとして捉えられている。ここにヴァーグナーのジークフリート暗殺の特質があると言えよう。ヴァーグナーにおいては神々の黄昏とジークフリートの死が平行して展開されているのである。ブリュンヒルデは今やジークフリートの死骸を前にして、神々に黄昏が訪れ、ヴォータンはついに安らぎを得るであろうことを悟って、二羽のカラスを故郷へ送り返すことを決意するのである。

それからブリュンヒルデは家臣たちにジークフリートの死骸を薪の山に運ぶよう指示すると、ジークフリートの指から指環を抜き取り、それをラインの乙女たちに返すつもりであることを歌い終えてから、その指環を自分の指にはめて薪の山に向かう。家臣から大きな燃え木を受け取ると、彼女はそれを振り上げて、カラスたちに向かって知らせをヴォータンのもとへ持ち帰るよう命じるとともに、岩山で今も燃えているローゲにヴァルハラへ帰るよう伝えてほしいと指示するや、燃え盛る松明を薪の中へと投げ込むのである。すると薪の山はたちまち燃え上がる。ブリュンヒルデはさらに二人の家臣が引いて来た彼女の馬を認めると、それに走り寄って、最後の歌を歌う。

Grane, mein Roß,
 sei mir begrüßt!
 Weißt du auch, mein Freund,
 wohin ich dich führe?
 Im Feuer leuchtend,
 liegt dort dein Herr,
 Siegfried, mein seliger Held.
 Dem Freunde zu folgen,
 wieherst du freudig?
 Lockt dich zu ihm
 die lachende Lohe?
 Fühl meine Brust auch,
 wie sie entbrennt;
 helles Feuer
 das Herz mir erfaßt,
 ihn zu umschlingen,
 umschlossen von ihm,
 in mächtigster Minne
 vermählt ihm zu sein!
 Heiajaho! Grane!
 Grüß deinen Herren!
 Siegfried! Siegfried!

Sieh!

Selig grüßt dich

dein Weib!

グラーネよ、私の馬よ、
 私の挨拶を受けよ!
 私がお前をどこへ連れて行くのか、
 友よ、お前は分かっていますか?
 お前の主人、私の今は亡き勇士、
 ジークフリートがあそこの火の中で
 燃え輝いているのです。
 親しき主人のあとを追うために
 お前は喜んでいなくのですか?
 ほほ笑む炎がお前を
 彼のところへ引きつけるのですか?
 私の胸もまた燃えているのを、
 お前も感じておくれ。
 明るい炎が
 私の心をとらえている。
 彼を抱きしめるように、と。
 彼に抱かれ、
 強い愛の力で、
 彼と契りを結ぶように、と!
 ハイアーヤーホー! グラーネ!
 お前の主人に挨拶をしなさい!
 ジークフリート! ジークフリート!

ごらん!

あなたの妻が歓喜に満ちて

挨拶するのです!

こうしてブリュンヒルデは勢いよく馬に飛び乗り、猛火の中へ一挙に飛び込むのである。突然ラインの水が溢れ返る。指環を奪う機会を窺っていたハーゲンは、指環を追って水の中に入るが、三人の水の乙女たちによって深みに引き込まれてしまう。用意周到なハーゲンもこの場面に至ってはあっけなく滅びてしまう。『ニーベルンゲンの歌』ではハゲネが最後まで反抗心を示して黄金のありかを決して明かさなかった(2367-73詩節)のとは、まったくの裏返しの関係である。一体、この結末は何を意味しているのだろうか。

炎の中へ身を投げるブリュンヒルデの行為は、『ヴォルスンガ・サガ』に由

来する²¹⁾が、ヴァーグナーではこの彼女の殉死の中には「権力に対する愛の勝利」がほのめかされていると言ってもよいであろう。『ジークフリート』第三幕においてジークフリートが岩山の周りに燃え上がる炎を飛び越えてブリュンヒルデの愛を勝ち得たように、ブリュンヒルデも今やこの最終場面で気高き英雄の亡骸を焼き尽くそうと燃え盛る炎の中へ飛び込んで殉死することによってジークフリートの永遠の愛を勝ち得たのである。今や赤々と燃え盛る炎は二人の愛の炎であると言ってもよいであろう。二人の愛の炎は今やギービヒ家の館から天上の神々のヴァルハルの城にも燃え移って、まさに神々は黄昏を迎えようとしている。ジークフリートの死はこうして神々の没落をもたらしたのであるが、しかし、ジークフリートとブリュンヒルデの愛によってその廃墟の中からはやがて愛する人間の支配する世界が生まれてくることが暗示されていると言ってもよいであろう。ハーゲンの「権力」は滅び去り、ジークフリートとブリュンヒルデの「死による愛」が勝利を収めたのである。

結び

以上のように見てくると、ヴァーグナーは『神々の黄昏』の台本を書くにあたって主な素材として北欧のエッダとサガおよびドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』を用いているが、それらの素材を単に再構成するのではなく、従来のニーベルンゲン伝承の殻を打ち破って、あるときにはそれらとは裏返しのかたちで、またあるときには自らの創作をも織り込みながら、独自の新しいニーベルンゲン世界を構築していることが容易に理解されよう。従来のニーベルンゲン伝承との比較においてヴァーグナーの特質をまとめると、次の通り五点に要約されよう。

まず第一の特質は、ジークフリートとブリュンヒルデの愛がはっきりとしたかたちで展開されていることである。この二人の愛は『ヴォルスンガ・サガ』に由来するが、そこでは二人が二度にわたって婚約を交わしたことがごく簡単に記載されているに過ぎなかった。それを敷衍して、二人を宿命的な愛によって結びつけ、序幕後半において彼らに愛の二重唱を高らかに歌わせたのはヴァーグナーの功績である。しかも二人の愛はジークフリートがブリュンヒルデにニーベルングの指環を与えることによって強められている。二人にとって今や指環は「愛」の象徴である。

21) 菅原邦城訳：前掲書111頁参照。

そのニーベルングの指環をねらっているのがハーゲンである。このグンターとは異父兄弟にあたるハーゲンの出自を考え出す際に、ヴァーグナーは素材として北欧の『ティードレクス・サガ』、その中でもいわゆる『ニフルンガ・サガ』を利用したと推定されるが、しかしそのハーゲンは北欧伝承におけるような単なる無名の妖怪の子ではなく、あの侏儒族アルベリヒ、すなわち、ラインの黄金から指環を作り上げ、のちにそれをヴォータンに奪い取られた恨みから、その指環に呪いをかけたあの侏儒アルベリヒの息子として登場しているところにヴァーグナーの独創性がある。これが第二の特質である。ニーベルングの指環を取り戻すためにヴォータンが英雄ジークフリートを世に送り出せば、侏儒アルベリヒはそれに対抗する英雄として不義の子ハーゲンを儲け、両者の争いは今やジークフリートとハーゲンの戦いとなったのである。アルベリヒの呪いを受け継いだハーゲンにとって指環は「権力」の象徴である。こうして一つの指環をめぐるジークフリートの「愛」とハーゲンの「権力」が衝突しながら、侏儒アルベリヒの息子ハーゲンの策略によってジークフリート暗殺の悲劇が展開していくのである。

その「愛」と「権力」の戦いにハーゲンが策略として用いるのが忘れ薬である。この忘れ薬に第三の特質がある。この忘れ薬は『ヴォルスンガ・サガ』に由来するもので、そこでは母后グリームヒルドがそれをシグルズに飲ませたのであったが、ヴァーグナーではその役割はハーゲンに移されており、しかもその薬はジークフリートが出会った過去の女性をすべて忘れさせるとともに、目の前にいる女性にたちまち惚れさせてしまうという効き目を持っている。この不思議な忘れ薬を飲まされて、ジークフリートはブリュンヒルデのことを忘れるだけでなく、目の前にいるグートルーネにたちまち惚れてしまっ、その愛を成就するために、グンターがブリュンヒルデに求婚するのに手助けを約束してしまうのである。

そのグンターへの援助を約束する際にジークフリートはグンターと「兄弟の契り」を交わすが、この兄弟間の誓いにヴァーグナーの第四の特質がある。この契約は『ヴォルスンガ・サガ』には読み取られず、『ニーベルンゲンの歌』に由来するものと考えられるが、そこではわずか一行で「二人は互いに誓いをかためた」(335詩節)と語られているだけであるのに対して、ヴァーグナーはそれを敷衍し、兄弟の契りを交わす場面を詳しく展開させることによって、この「兄弟の誓い」に大きな意味を込めているのである。ハーゲンがのちにジークフリートを暗殺する口実としたのも、このグンターとの契りをジークフリートが破ったからであるとしている。しかし、ジークフリートの死はあくまでも

ニーベルングの指環の呪いによるものである。

そのジークフリートの暗殺が従来のニーベルンゲン伝説に見られるような単なる暗殺ではなく、アルベリヒの指環の呪いによって神々の黄昏とともに平行して展開されているところに、ヴァーグナーの第五の特質、しかも最も際立った特質がある。その「神々の終焉」は序幕冒頭においてすでに三人の運命のノルンによって予告されている。しかもそれがアルベリヒの呪いによるものであることは、そのノルンたちの編んでいる綱が切れる前にアルベリヒの幻影が現れたことから明らかである。さらにその「神々の終焉」はその後ヴァルトラウテが岩山にブリュンヒルデを訪ねて、父ヴォータンが日毎に衰えているさまを語ることにしても明らかにされているが、「指環をラインの乙女たちに返してほしい」というヴァルトラウテの警告をブリュンヒルデが拒否することによって、その「神々の終焉」は今やジークフリートの死に結びつけられたと考えてもよいであろう。こうして「ジークフリートの死」は、序幕冒頭において「神々の終焉」が三人のノルンたちによって予告されたと同じように、第三幕冒頭において三人のラインの乙女たちによって予言されるのである。それまで指環の力も知らず、それを利用しようとしなかったジークフリートに対してはアルベリヒの呪いも効き目がなかったが、しかし、今やラインの乙女たちからその秘密を知ったからにはもはやその呪いから逃れることはできないのである。こうしてジークフリートは侏儒アルベリヒの息子ハーゲンの策略によって、神々の終焉とともに滅びていったのであるが、そのハーゲンも同様に指環の呪いによりラインの深みに引き込まれてしまう。この結末は一体何を意味しているのだろうか。

楽劇『ニーベルングの指環』四部作全体は神々の長ヴォータンと侏儒族アルベリヒの戦いであり、それが『神々の黄昏』においてはジークフリートとハーゲンの争いとなったことについては、すでに述べた通りである。両者の対立は「愛」の世界と「権力」の世界との対立である。この二つの世界が対立する中でジークフリートはアルベリヒの「憎悪」を受け継いだハーゲンの策略によって暗殺されるが、しかし、その死はその後真相を知り、知識を取り戻したブリュンヒルデの殉死によって救済されたと考えてもよいのではないか。すなわち、ブリュンヒルデの殉死には「権力に対する愛の勝利」がほのめかされているのであり、ジークフリートがかつて炎を飛び越えてブリュンヒルデの愛を勝ち得たように、ブリュンヒルデもまた今や燃え盛る炎の真っ直中に飛び込んでジークフリートの永遠の愛を勝ち得たのである。二人の愛の炎は赤々と照り輝く炎となって、今や天上の神々のヴァルハルの城にも燃え移って、神々はついに滅

び去ってしまうのである。神々の世界はこうして終焉を迎えたが、しかし、この廃墟の中からはやがて愛する人間の支配する新しい世界が生まれてくることが暗示されているのである。この点に愛も無残に滅び去ることを描いた中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』とは根本的に異なるヴァーグナーの新しい世界が読み取られ、それがまたヴァーグナーの作品の特質でもあり、魅力でもあるのである。
(2002・9・12)

*本稿は同じ時期に執筆した拙稿：R. ヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』におけるハーゲン像の特質（稲元萌先生古稀記念ドイツ文学・語学論集2003年4月）と内容の面で当然のことながら重複する部分が多くなっていることを付記しておく。